
お前は 小児外科医に なれない

誰かの大切な子供にメスを入れるということ



セントルイス大学
カーディナルグレノン小児病院

宮田 真

中外医学社

推 薦 文

本書は日本の医学部を卒業後、アメリカでの外科研修を経て米国小児外科指導医となるという途方もない夢の頂に立った宮田真先生のパーソナルドキュメンタリーです。宮田先生は、独学でネイティブレベルに英語を修得してしまうという稀有な才をもちながらも、その感性の純朴さについて共感してしまう愛媛育ちの人です。北米最高クラスの競争率である小児外科。その狭き門をくぐるべく、フランス語圏の小児外科フェローシッププログラムを受験し、覚えてたのフランス語の寸劇で面接を突破するなど、その酔狂とも言えるクリエイティビティが、彼の唯一無二の物語を生んでいきます。

アメリカでの外科修行中からリアルタイムでブログに書き残されていた内容をそのまま掲載しているエピソードが多く、成功者の目線ではない、迷える挑戦者としての等身大の息吹が感じられます。第一幕を「冒険譚」としてワクワクしながら読み進められるのはそのためでしょう。第二幕は小児外科という夢の門をくぐった先の物語です。臨場感に満ちた手術描写、難症例を乗り越える中で抱く外科医としての葛藤、たくましく生き抜く小さな患者さんや頼もしい仲間たちの出会いと別れを通じて見えてくる、小児外科医という仕事。その素晴らしさが生き生きと感じられます。一方で、アメリカの医療業界のリアリティが内面から描かれ、厳しさに直面するエピソードも少なくありません。

米国小児外科指導医として疾走し、挑戦を心から楽しむ宮田先生の現在地が描かれます。米国腎臓内科指導医であり、宮田家の軍師でもある奥様、子供たちとの異国での生活風景から、アメリカ文化を垣間見るのも本書の楽しみ方の一つです。

宮田先生の指揮する小児外科フェローシッププログラムを卒業した日本人小児外科フェロー「マホ先生」として、私は本書に登場します。師匠ができてあがるまでの舞台裏“The making”は、迷いや苦難の時期が師にも存在していたことを教えます。「明日は1%でも良い自分になりたい」という渴望こそが、夢を実現できる人のマインドセットである、とこれ以上ない説得力で、静かに

胸に迫ってくるのです。

この破天荒な挑戦の物語が、なにかを成したい人の心に灯をともし、背中を押してくれることでしょう。その数ページとなれたこと、そして宮田先生を生涯、師として仰げる幸運に感謝しています。

京都府立医科大学小児外科

元カーディナルグレノン小児病院小児外科フェロー

井上(倉島)真帆

まえがき

「お前には無理だ」

何年も見続けてきた夢に対して、面と向かってこのように言われた経験はあるでしょうか？ 言われた時の反応は、人それぞれだと思います。

この本を手にとってくださった人の中には、医学部を目指す高校生やその親御さん、海外志向の医学生、研修医、若い医師、あるいはベテラン医師の方もいるかもしれません。本書は、そのような方々に向けて、僕のこれまでの歩みを2つの「幕」として描いたものです。

第1幕では、外国人で凡人である僕が、失敗と再挑戦を繰り返しながらアメリカの小児外科医になるまでの“Making”の紆余曲折を、そして第2幕では、念願の小児外科医として独り立ちしてからの、たくさんの仲間や患者さんとの出会いと別れのドラマを記しています。エリートたちがしのぎを削るアメリカ小児外科の世界に飛び込むには、失敗しても立ち上がる「グリット（やり抜く力）」が不可欠でした。また、小さな患者さんたちとの経験を通して感じた小児外科医療の素晴らしさと、思い通りにいかないときの落胆や歯がゆさも、ありのままに綴っています。

本書は、いわゆる「海外臨床留学指南書」ではありません。必要な情報やHow toを小ざれいにまとめた本でもなければ、同じことをすれば結果が出るという再現性もないでしょう。「ふーん、珍しい生き方だな」「こんな医者のカリヤもあるんだな」という感想の人がいれば、中には少し嫌悪感を抱く人もいてもおかしくはありません。でも僕は、読者の10%くらいの人にとっては、本書が魂を揺さぶられるような高揚感や、「自分もやってやる」というやる気の源になってくれたらと願っています。そのさらに一部の人が、実際に自分の行動やその後の人生を変えるきっかけになれば、これ以上の喜びはありません。その熱量が向かう先は、小児外科でなくても、医学でなくても構わないのです。

タイトルの由来は、僕が2007年の渡米前に始めたブログ『The Making Of A

Pediatric Surgeon — 誰かの大切な子供にメスを入れるという仕事』です。自己満足で始めたブログには、外科研修プログラムに入るための奮闘、生き残るためのあがき、そして夢への挑戦と挫折が克明に記されています。今読み返すと、懐かしくもあり、こっぴどくもあるその記録が、本書のベースとなっています。

「誰かの大切な子供にメスを入れるという仕事」——小児外科ほど、時に涙が出るほどの嬉しさ、楽しさ、やりがい、そして悔しさ、怖さ、ストレス、尊さを兼ね備えた分野はないと、僕は思っています。さあ、幕を開けましょう。

「お前には無理だ」と言われながら、この最高のフィールドにたどり着くまでの冒険と、その先で繰り広げられるドラマを、ご一緒に。

2026年春

宮 田 真

第 1 幕

The Making of a Pediatric Surgeon

Every adversity, every failure, every heartache carries with it the seed of an equal or greater benefit.

あらゆる逆境や失敗、苦しみの中には、それに匹敵する、
あるいはそれ以上の成功の種が隠されている。

—— Napoleon Hill
ナポレオン・ヒル

話は渡米前の2007年にさかのぼる。アメリカで外科研修を受けるという夢を掲げ、医学部を卒業して5年目だった僕は沖縄の米国海軍病院で1年間のインターンとして働いていた。

鬼才・アルビアー先生との出会い

日本に数カ所ある米軍病院。この中で横須賀と沖縄にある米国海軍病院では、日本人インターンを毎年6人採用していた[※]。1年限りのインターンシップだが、アメリカで臨床医として働きたい人にとっては、日本にいながら完全に英語の環境で、アメリカ式の医療の仕組みに慣れることができ、アメリカ人のスタッフと働いて推薦状を書いてもらうことにつながるという、理想的な環境だ。インターンになるための競争は厳しいが、もしインターンになれば渡米の夢に大きく近づくことができる。

米国海軍病院に来る患者はアメリカ人とその家族で、家族が日本人という場合もある。日本人インターンの重要な任務として、英語の不自由な日本人のための通訳や、海軍病院の限られた施設では対応しきれない検査や治療を行うために、日本の現地の病院に患者を搬送するコーディネート全般がある。我々6人のインターンは、運命共同体としてこの仕事に挑んだ。6人それぞれの夢に向けて、1年しかないこのインターンシップを有意義に使おうと、基地内では日本語禁止ルールを作り、英語漬けの生活を送っていた。

基地内にはアメリカのスーパーマーケットもあればレストラン、図書館、映画館、ボーリング場などが揃っていて、基地外に出なくても生活を完結することができた。基地内の独身寮に住んでいた僕は、外科レジデンスのポジションが得られれば始めることになる翌年からのアメリカ生活を、日本にいながら疑似体験していた。時々基地外に出て食事をするときには、「今日は『日本に』夕食を食べに行こう」という感覚になるようなアメリカンな環境だ。

沖縄米国海軍病院では1年の間、外科・内科・ERなど各科をローテートする他、エレクトイブ[※]といって1カ月どこに行き研修をしても良いという期間がインター

※ 当時はこの2カ所だったが、今ではフェローという形で横田、三沢、岩国、佐世保にある米軍基地のクリニック・病院でも採用がある。

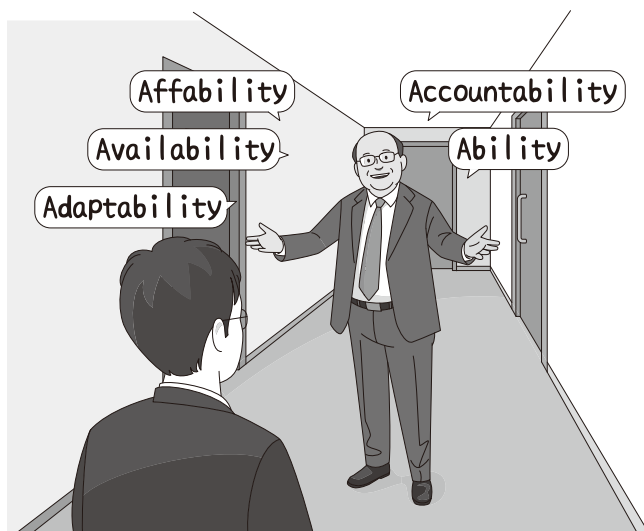
ンに与えられていた。僕はエレクトティブを使ってアメリカの病院を見学することにした。日本でも小児外科の経験がなかった僕は、メンターの外科医アルセイディ先生にお願いしてアメリカの小児外科を見学させてもらうことになった。これでつながったのが、のちに僕のロールモデルとして長年お世話になることになるアルビアー先生だ。

アルビアー先生はフィリピンが生んだ鬼才の小児外科医だ。その当時で60歳代前半。外国人でありながらアメリカで外科レジデンシー・小児外科フェローを経て小児外科医となった数少ない外科医で、ペンシルベニア州の州都ハリスバーグで働いていた。

「5つのAを大切にしろさい」

ハリスバーグは州都といっても決して都会ではなく、緑にあふれた静かな街だった。その中にたたずむ小さなクリニックで患者をみる合間に、アルビアー先生はこのような僕に話した。

「Affability、Availability、Adaptability、Accountability、そして Ability だよ」



患者や医療者にとって親しみやすく、いつでも駆け付けてくれる存在で、柔軟に対応できて、信頼できて、そしてそもそも医師としての力量を持て、ということだ